様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６６４

研究課題名（和文）日独対照研究に基づく総合ドイツ語文法の試み：基本語彙及び頻度の観点を交えて

研究課題名（英文）Description of a comprehensive German grammar based on Japanese-German comparative study: Relevance to the basic vocabulary and frequency

研究代表者
大薗　正彦（Ozono, Masahiko）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：１０２９４３５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，基本単語5000語のデータ整理・分析を行いながら，基本語彙や頻度データとリンクさせた包括的なドイツ語文法の記述を進めた。類義語分析にコロケーション調査が有用であること，語学学習の入門段階では語構成に関する知識はあまり有用でないことなどが明らかとなった。あわせて認知言語学的観点から，日独対照研究を進め，日独語の差異に着目した，日本人学習者のためのドイツ語文法について考察を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，既存の文法や理論的研究の知見を活かし，コーパス分析の成果も取り入れ，日本人の立場から，本格的なドイツ語文法構築を目指すものである。とりわけ，頻度データを取り入れ，基本語彙との関連において文法を記述しようとする点，および日独語の差異に着目するという点が特徴的である。本研究は，包括的にドイツ語の全体像に迫ろうとする試みであり，今後のドイツ語学・言語学研究へ基礎データを提供するのみならず，ドイツ語教育への応用という点に関しても極めて実際的な意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In this research, I aimed to describe a comprehensive German grammar linking with the basic vocabulary and the frequency data by analyzing the database of 5000 basic words. The results of analyses showed that a collocation analysis was useful in describing the synonyms, and the knowledge about word formation was less relevant at the elementary level of language learning. Furthermore, I conducted a Japanese-German comparative study from the aspect of cognitive linguistics and analyzed the German grammar for German learners in Japan by focusing on the differences between Japanese and German language.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語　基本語彙　コーパス　頻度　文法　事態把握

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在，大規模コーパスのデータを活用し，日本人のための本格的なドイツ語学習を目的とした，本格的なドイツ語文法書はないと言ってよい状況である。かつては，ヨーロッパの言語研究を幅広く取り入れた相良守峯著『ドイツ文法』(1951) やドイツ語に関する該博な知識に基づく関口文法と呼ばれるものがあった。その後，生成文法，依存関係文法などの理論的研究が盛んになるとともに，ドイツ語の理論的研究も盛んになった。しかし，理論的研究が一定の成果をあげてきた一方で，個別言語としてのドイツ語文法そのものの研究は停滞しているという印象を受ける。それを補完するような形で，大規模コーパスに基づくコロケーション研究などが盛んになってきたが，それらも本格的なドイツ語文法作成に必要な成果をあげるまでになっていない。とりわけ我々の母語である日本語との相違に目を向けてデータを利用するという試みはほぼなされていないと言ってよいだろう。

２．研究の目的

本研究は，このような流れを踏まえ，過去数十年以上にわたるドイツ語に関する知的財産をもとに，現在利用可能なコーパスデータを活用し，使用頻度なども導入し，かつ日本語との対照研究の成果から再構築したドイツ語文法の作成を目指す。

ただし，限られた期間内であらゆる項目を細部にわたって調査することは不可能であり，また実際的ではないため,本研究課題では基本語彙を中心に据えた文法記述を試みるものである。研究代表者は，研究開始時までに日本人学習者のための，頻度に基づく基本語彙（5000 語）の選定および検証を終えている。これに続く形で，本研究では大きく次の３段階の具体的目標を設定する。①基本単語 5000 とその頻度調査に基づく初級・中級文法項目の再検討および新たな文法記述（継続課題）。②特に日本語と表現様式が異なるドイツ語表現に関する頻度調査およびその体系的記述。③以上の調査を踏まえた，日本語を出発点とした総合ドイツ語文法の（再）構築。

３．研究の方法

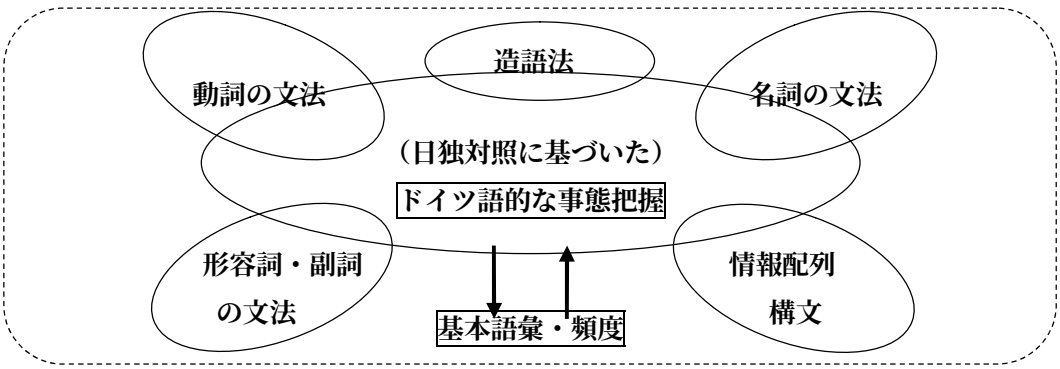
上のような目標設定が可能になった背景には,大規模コーパスの充実と利便性の向上がある。ドイツ語の代表的なコーパスには，DeReKo（マンハイム・ドイツ語研究所），DWDS（ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー）などがあるが，ここ 10 年余りの間にインターネット・ブラウザを介した利用が可能となり，検索機能も充実してきた。

本研究では，複数のコーパスデータを活用し，基本語彙（5000 語）を中心とした語彙体系分析および頻度調査を行う。この個別調査を文法記述の全体的な枠組みとリンクさせて全体のアウトラインを作成しつつ，最終的には，分析の精緻化・集積化を進め，全体をまとめる。成果の発信はホームページなどで順次行っていく。なお，本研究の目的のためには地道な基礎データの収集・構築が重要であり，データ整理のために研究補助（複数）の協力を得るものとする。大きく次の二つの段階を踏む。

(1)　基本語彙（5000 語）に基づいた語彙体系分析および頻度調査を継続的に行いながら，データ構築を着実に進めていくことが本研究の出発点となる。次に示す通り，大きく，基本語彙内の調査で済むもの（①，②）とコーパス調査が必要なもの（③，④）に区分される。使用コーパスは，検索機能の充実という点から，主に DeReKo と DWDS（上述）を用いる。なお，意味が関わってくる頻度調査についてはサンプル調査を行う。

①基本形の頻度： 特定の文法項目に関わる語の頻度，基本語彙内での意味体系など。
②語構成の頻度： 接辞・語基の頻度，競合する形態の頻度など。
③語形の頻度： 同音異義語の頻度，競合する変化形の頻度など。
④語群の頻度（コロケーション含む）： 競合する共起語の頻度，語順の頻度など。

(2)　個別調査を全体的な枠組みとリンクさせて全体のアウトラインを作成していく。その構想をイメージ化するなら下図のようになる。実際には各項目がここまで離散的な状況にはならないと思われるが，図示の必要上から単純化してある。



日本人が自然なドイツ語を使えるようになるためには，最終的に異なる発想の表現（異なる事態把握に基づいた表現）を学習する必要がある。本研究では，主に翻訳データを用いながら，対照的観点からの表現形式の相違についての調査も積極的に行う。

４．研究成果

まず，基本語彙の分析を前進させることができた。基本単語 5000 語の品詞・用法整理などの基本的作業を進めながら，語構成や類義語などの分析も行った。研究補助の協力も得ながら進めたが，地道な作業であり，実際にはこれらの作業に膨大な時間が費やされた。データの整理・分析は研究期間終了後も継続的に行っていく予定である。この種のデータは論文の形で発表するのには馴染まないが，整理した形でネット上において順次公開して行くつもりである。一部はすでに公開しいている（以下にあらためて述べる）。蓄積されたデータは，今後，教材や辞書を作成する際の基礎データとして直接的・間接的に応用できるだろう。以下，(1) データの整理と公開について，および (2) 語彙と文法をめぐるいくつかの研究成果について，簡単に述べる。

(1) 文法と基本語彙を関連させながら，広く一般のドイツ語教育に供するため，ホームページによる情報発信を継続的に行っている。研究代表者は，すでに文法のページと基本語彙のページを作成していたが，さらに「文法と語彙」のサイトを立ち上げた（アドレスは下の「〔その他〕ホームページ等」を参照）。現時点で一部作業中であるが，例えば，動詞という項目であれば，基本的な動詞としてどのようなものがあるのかという情報に加え，不規則動詞，単一動詞，複合動詞，再帰動詞など下位分類された動詞の一覧，さらには「-en 以外で終わる動詞」などの語構成に関する情報も得られる。名詞であれば，名詞の性の情報，複数名詞，形容詞変化の名詞，男性弱変化名詞などの一覧が得られる，といった具合である。また，今回の研究課題に取り組むにあたり，本格的に文法ページの改訂作業にも着手し，文法情報と語彙情報がリンクするようにした。例えば，動詞という項目が扱われる場合は，基本的な動詞にどのようなものがあるのか，その場でリンク先にジャンプできるよう工夫されている。

(2) ここでは，いくつかの研究成果について概略的に紹介する。詳細はホームページ上で「解説」として（あるいは論文の形に馴染むものは論文の形で）発表していく予定である。すでに発表済みのものについては以下の「主な発表論文等」を参照。

①コーパスによる類義語分析。調査によりその有用性が確認できた。例えば「始まる，始める」を意味する anfangen と beginnen は，従来の辞書記述では学習者にとって違いが分かりにくい。また既存の類義語辞典を参照しても要領を得ない状況である。今回行った頻度調査・コロケーション調査では次のような点が明らかとなった。まず，anfangen は話し言葉，beginnen は書き言葉的傾向を見せた。ただしこの区別は厳密なものではない。次にコロケーション調査の結果から，両者は用法や結びつく語句に偏りを見せることが分かった。大雑把に anfangen は動作を表す名詞や zu 不定詞句と結びつき「取りかかる，着手する」という意味合いで用いられる傾向が強い。これは自動詞用法でも同様である。一方，beginnen は特定の日時・場所で行われる出来事やイベントが「始まる」という意味合いで用いられやすい。

②基本語彙と複合語・派生語の関係。語彙学習において造語法の知識を教えることがあるが，今回の調査により，接辞ごとの重要度の違いが確認されるとともに，入門段階では，接辞に関する知識はあまり有用でないことも分かった。接辞の知識が有用になるのはおおよそ 3000 語レベルの段階からだと想定される。

③基本語彙と専門語の関係。今回予備的な調査としてサッカー用語と基本語彙の重なり具合などを調査した。専門用語の相当数は基本語彙から成っている，あるいは基本語が多義的に使用されていること，さらにはサッカーの試合報道記事において統語的な特徴が指摘できることなどを確認した。言語における「専門語」の問題は今後の研究課題として考えている。

④日独対照研究。主に翻訳資料を用いて，日独語の事態把握について分析を行った。以前より空間と知覚に関する言語現象の分析を進めてきたが，今回の研究期間内においては，とりわけ自己と他者をめぐる言語現象について分析を行い，話し手と聞き手の関わり方がドイツ語と日本語において根本的に異なっている可能性があることを明らかにした。大雑把に言って，ドイツ語は話し手と聞き手が向かい合う形（相補的スタンス）での対話的な発話を指向するのに対し，日本語では話し手と聞き手が同じ方向を見るという形（同型的スタンス）での独話的な発話を指向する。ただし，日独語双方において，その区分は傾向の問題である。

話し手と聞き手の間主観的な相互作用を調整する言語手段という観点から，ドイツ語の心態詞（基本語彙に含まれる）の分析を行い，日本語の終助詞との対照を行った。視点の相互作用ということで言えば，日独両言語において共通の原理を想定することが可能である。ただし，両言語はその適用の度合いにおいて差異を示す。ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞の決定的な相違は，その定着度・義務性にあるが，その差異は両言語の話し手による事態把握の傾向の

差異に還元できるものである。

⑤翻訳をめぐる問題。対照研究に翻訳資料を用いる際の問題点を押さえるという観点から，翻訳方法についての考察を行った。当然のことかもしれないが，翻訳の営みが ST（起点テクスト）指向的であるか TT 指向的（目標テクスト）であるか，という点が注意すべき点として挙げられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①Masahiko Ozono, Intersubjektivität am Beispiel von Modalpartikeln. Eine kontrastive Fallstudie aus japanischer Sicht, 静言論叢，査読無，1 号，2018，17-31 https://doi.org/10.14945/00024965

②大薗正彦，構文の適用可能性――日独語の好まれる事態把握との関連において，Sprachwissenschaft Kyoto，査読有，15 号，2016，1-22

〔学会発表〕（計３件）

①大薗正彦，心態詞の義務性をめぐって――実証的アプローチ，日本独文学会 2016 年秋季研究発表会シンポジウム「心態詞はなぜ使われるのか？――心態詞の出現する状況と認知」，2016 年 10 月 23 日，関西大学（大阪府吹田市）

②Masahiko Ozono, Perspektivische Interaktion - Ein deutsch-japanischer Vergleich, Siebte Internationale Konferenz der Deutschen Gesellschaft für Kognitive Linguistik, 2016 年 10 月 7 日，デュースブルク・エッセン大学（ドイツ）

③Masahiko Ozono, Intersubjektivität am Beispiel von Modalpartikeln，日本独文学会第 44 回語学ゼミナール，2016 年 8 月 31 日，多摩永山情報教育センター（東京都多摩市）

〔図書〕（計７件）

①今野喜和人（編），大薗正彦 他，春風社，翻訳とアダプテーションの倫理――ジャンルとメディアを越えて，2019，414＋xi（135-162）

②大薗正彦，三修社，サッカーを楽しむドイツ語，2018，174

③大薗正彦 他，開拓社，ことばのパースペクティヴ，2018，528（28-40）

④Roland Schulz，大薗正彦，三修社，耳から学ぶドイツ語，2018，109

⑤Akio Ogawa (Hg.), Masahiko Ozono et al., Stauffenburg Verlag, Raumerfassung. Deutsch im Kontrast, 2017, 236 (77-87)

⑥Akio Ogawa (Hg.), Masahiko Ozono et al., Stauffenburg Verlag, Wie *gleich* ist, was man ver*gleich*t? Ein interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West, 2016, 369 (263-271)

⑦宮下博幸（編），大薗正彦 他，日本独文学会，ドイツ語と日本語に現れる空間把握――認知と類型の関係を問う（日本独文学会研究叢書 112），2016，93（51-65）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

なし

○取得状況（計０件）

なし

〔その他〕

ホームページ等

ドイツ語基本単語 5000　http://moz.la.coocan.jp/wortschatz/

ドイツ語初級文法のポイント　http://moz.la.coocan.jp/grammatik/

ドイツ語の文法と語彙　http://moz.la.coocan.jp/grammatik-wortschatz/

６．研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。